

## 思い出

水井直之

我々の学生時代はまさに日本の戦争時代と重なった。小学校三年の時に日中戦争が始まり、入学の年の暮に太平洋戦争が始まり、卒業の年に戦争が終わった。

我々世代は一九二九年の世界大恐慌のさなかに生を受け、戦争と敗戦を体験し、窮乏の戦後を送った。そして社会人となるや、猛烈な働き蜂となつて高度成長をなすとげた。その後、バブル崩壊、不況となつて年金生活に入った。

学生時代は何の疑いもなく軍国少年に育てられていった。それでも城北の市ヶ谷時代は自由で勉強できる環境にあったが、上板橋時代になると配属将校による軍事教練が行われ、御殿場駅から銃をかつぎ富士山麓で匍匐（ほふく）前進をやらされたことを思い出す。そして、軍需工場への勤労働員が始まり、卒業間際には東京大空襲の焼跡整理に駆り出され悲惨な光景を目にした。こうして、多感な青春期に戦争で傷を負った。

今や、我々は八十年代半ばになった。子どもの頃は人生五十年と言われていた。その頃に比べて随分元気で長生きとなった。また、今の豊かさは想像を超えたものだ。最近、日本経済が回復基調にあるのは喜ばしい。

一方、財政の赤字、急速な少子高齢化等懸念されるし、血なまぐさい臭いも立ちこめ始め、歴史の振り子が元に戻ろうとしないか、怖れている今日この頃です。